

素晴らしい須走を知りたい!

「すばらしい隊」養成講座 第5回講座概要

第1部：富士山を学ぶ／中級編「富士山の信仰と登山道」

- 日時：令和2年11月28日（土）9時～12時
- 場所：須走地区コミュニティセンター
- 講師：大高 康正氏 静岡県富士山世界遺産センター
学芸課教授



■講義概要

1. 古地図で楽しむ富士山

- －本書は「古地図で楽しむ」シリーズの富士山をテーマにした1冊。富士山は静岡県・山梨県の七つの自治体にまたがって位置しているが、地元の事に詳しい方に書いてもらおうということで、その七つの市町村の文化財行政に係わっている方、自治体史の執筆に実際に係わっている方を中心に執筆をお願いしている。目次の紹介、Part 1～4まで分けている。
- －Part1は「富士山の信仰世界」、富士山の参詣曼荼羅で、1月から展示する松栄寺本の解説を私が書いている。富士山頂は江戸時代までと明治時代で様変わりしている。神仏分離が行われて、観の変化がどういう形であるかを、仙台の東北歴史博物館(元富士宮市の学芸員)梶山野執筆である。
- －Part2は富士山の登山道と登山道以外にも信仰に関わる道についてである。①表口登山道は富士宮側の登山道を私と富士市の井上さんと分担している。②明治39年に新しい登山道に変わり、今の富士宮登山道に繋がり、大宮口新道と呼んでいる。富士宮市の松本さんに書いている。須走口の登山道は8合目で吉田口の登山道と合流して、そこから一つの登山道になっている。③吉田口登山道は富士吉田市のふじさんミュージアムの篠原さん。④須走口登山道は、すばらしい隊でも講演いただいた菊池先生に書いている。⑤⑥山梨の方に抜けていく籠坂峠の話と、山中口登山道という山中湖の方から登るルートが近代に一時期あり、その話を山中湖村の野村さんに書いている。⑦船津口(河口湖町)については、河口湖町の杉本さんに書いて頂いている。川口という集落を通っていく登山道で船津口とも呼んでいた。⑧精進湖から青木ヶ原の方へ抜けていく登山道も一時期近代に使われており、富士河口湖町の町史編纂室長の村石さんに書いている。⑨須山口、富士サファリパークのあたりに須山集落があるが、そこから上がる登山道。裾野市史などを担当していた松田香代子さんに書いている。⑩御殿場口登山道は、2合8勺で須山口登山道と合流する近代になってから開かれる登山道の事を、御殿場市の勝俣達哉さんに書いている。⑪富士市から須走まで、裾野市十里木を突き抜ける道があり、そこが非常に迷いやすい道だったそうで、それを何とかしようということで、自分で石を運んで色んなルートの分岐に道しるべを建てて回った仁藤春耕がいる。富士市の方で街道沿いにいくつか残っている。礎の道しるべをたどることで富士市の郷土史を研究している影島孝さんに紹介していただいている。
- －Part3は富士山の登山口集落。①大宮は富士宮市街になる。全国各地に大宮という地名が付いている所があるが、大きなお宮がある所にあると思ってい。静岡県は昔、駿河国、伊豆国、遠江に分

かれていた。全国各地に一宮という大きなお宮が認定されていて、一宮になっていたのが駿河国の場合、富士宮の富士山本宮浅間大社になる。一宮があるところがだいたい大宮という名前が付いている所が多く、富士宮も昔大宮町と呼ばれていた。埼玉に大宮市があったが、武蔵野国の一宮の氷川神社があるので大宮と言われていた。②富士宮の町と、そこから8 km位上がったところにある村山という集落についての話しと、③上吉田の集落。上吉田と下吉田に分かれているが、上吉田に登山者の方をお迎えする集落ができていた。④須走の集落の話⑤河口という町を含めて5つの登山口集落を紹介している。この須走の町に江戸時代17軒の御師の方がいたという話があったが、その他それぞれの集落に何人も御師が住んでいたりした。吉田・須走・河口・須山の集落には御師と言われている方がいて登山者の方をお迎えしていたが、表口の登山道にかかわる登山口の集落の富士宮の大宮町と村山の山伏の集落の2つは、御師とは呼んでいなかった。大宮町は浅間大社の社系の方が道者の方をお迎えしていた。村山は山伏が道者坊(道者の方をお迎えする宿坊のこと)を行っていた。

—Part4については、富士山周辺が色々正業にかかわって活用されてきたという話を4つ紹介している。面白い話が入っている。富山の薬売り(配置薬、家々に薬箱があり、使い切った分だけお金を払い、また補充していくというものは、立山の信仰を広めていった御師の方が全国各地にお札の配札で回っていく時に、お土産に薬を持って行ったのが元になったと言われている。富士吉田の御師も泊まった方に薬を渡していた。富士吉田の富士山の麓にあった薬園で作った薬を渡していた歴史があり、齋藤暖生氏にそれに係るようなことを書いて頂いている。

2. 富士山の登山口と登山道

—江戸時代以前も現代も基本的には「古地図で楽しむ富士山」で紹介した山中湖口や精進湖口を除くと基本的には4つのルートは今も昔も大きくは変わっていない。通るところ自体は変わっている。「表口」は世界遺産的に「大宮・村山口」と登録されている。大宮は富士宮の市街地を起点とし、そこから村山という修験道の山伏の集落を通っていく登山口。基本的には昔の資料を見るとほぼ「表口」という名前が出てくる。浅間神社のある辺りを起点として山頂に至る登山道。「須山口」は裾野市の須山浅間神社を起点として山頂に至るルート。「須走口登山道」はこちらの辺りを起点として山頂に至る登山道。8合目で吉田口登山道と合流していく。「吉田口」は富士吉田から山頂に至る登山道になる。大沢崩れがあったり、青木ヶ原がある辺りはルートとしてはよろしくないもので、使われていない。たくさんルートがあるのは、「表口登山道」の富士宮口は京都と江戸を結ぶ東海道が通っている。東海道を使う人にとって正面になる、一番近い登山道になり、富士山から西側の地区の方が昔から多く利用していた登山道になる。「須山口」については、下りていくと伊豆の方に出やすいので、伊豆の方の人が須山を使うことが多かったと言われている。須山は「大宮・須走口」の中間あたりになり、十里木をまたがっているもので、それぞれのルートから流れてきた方が須山を使った。須山の隣に御殿場があるが、御殿場は御殿場線が開通した時に丹那トンネルができるまでは東京に行くルートになっていて、非常に便が良かった。御殿場を使う人が富士山に登る時にいいルートということで明治になって開かれたのが御殿場の登山道。須山の登山道にぶついているが、須山口の登山道は昔のまま使われることはなく、近代になってからは御殿場口登山道が使われるようになっていく。須走は、須走を下ると、足柄駅に下りていき、足柄峠を越えて相模の国へ抜けるルートになっているので、東の方に出やすいルート。吉田口は、上に江戸に繋がる道があり、関東の方から来る方が非常に利用しやすい、便の良い登山道。

3. 富士山の信仰の歴史

—富士山信仰なのか富士信仰なのか？学術的な文章を見ると富士山信仰と書いてあるものがあまりなく、富士信仰と書いてあるものが多いと思う。富士=富士山で、富士信仰と言われている。富士信仰というと、富士講などの宗教にかかるものもあり、噴火の活動が激しい富士山を原始的に拝むという自然信仰を極めたような時代も含めて色んな時代の富士山の信仰を雑多にとらえる時に我々は富士山信仰という言い方を敢えてするようにしている。そうすると色々な時代の拝み方や、時代の変化も含めてまとめてお話ができる。遥拝・登拝・巡拝・近代登山の大きく4つの時代に分けられる。遥拝は原始・古代に関わる頃、登拝が近世・中世、平安時代の終わりから江戸時代、巡拝は江戸時代、近代登山は明治以降の話。説明がしやすいのでそういう形で説明している。ただ、それぞれの時代が全くこれだけではなく、実際はいろいろな時代にいろいろな要素が混じっている。外国人の方にも世界遺産富士山を説明する上でこういうストーリー立てがご理解いただきやすいのではないかとこのような形の整理をして説明している。それぞれの時代に関わるトピックを紹介している。遥拝は噴火がひとつのテーマになっている。登拝は修験道、いわゆる山岳修行。近世、江戸時代は富士講、宗教のグループが関わっている。近代になると交通手段が変わってくることで登山の仕方自体が変わっていく。

—最初に原始・古代の遥拝の時代、富士宮市大鹿窪遺跡は教科書にも掲載される縄文時代の草創期の遺跡。新富士火山から流れてきた溶岩の台地上にある集落。国内の最古級になるような古い竪穴住居の集落跡や多数の土器や石器類が見つかっている。集落から北東方向に富士山がきれいに良く見える場所に作られていて、溶岩の台地上にあるので、もしかしたら古い富士山の信仰に関わるのではないかとこの遺跡なので、よく取り上げられる。縄文時代の中頃の遺跡が富士宮の上条にある千居遺跡。今は、柵があり、中には入れない。大石寺の境内の中になる。富士山に向けて直線状に石が並べてあるように遺跡が見える。富士山方面に石を並べて、祭祀を行っていたのではないかと考えられている。富士市、富士宮市は古墳が多く残っている。その中の一つ、丸ヶ谷戸遺跡は、弥生時代から古墳時代への過渡期となる3世紀初頭頃の有力者のお墓。前方後方墳。大型の竪穴住居の跡が見つかっている。これも富士山の方を向いてお墓が作られている。

4. 噴火と遥拝

—原始の時代の遺跡は、紙に書いたものが全くない時代。残っている遺跡から想像するしかないが、文献資料が登場するのが8世紀くらいから。どういう事が問題になって書かれているかということ、富士山の噴火の活動が活発化し、鎮火の祈りをささげる必要があるということ。鎮火の祈りを行うために浅間の大神をお祀りする。浅間の大神をお祀りするのが浅間神社で、鎮火のために作られたのが発祥だと言われている。富士宮にある山宮浅間神社は、本殿や拝む場所がない。溶岩流の末端部になり、富士山を直接拝むような場所を作っている。真後ろには富士山がきれいに見える。ここがいわゆる遥拝、富士山を拝むための古い祭祀の形だったのではないかとされている場所。こういう場所が各地に作られていったが、より里に近い場所に常駐の神官の方を据えてお祀りするようになると考えている。それが山宮浅間神社から下りてきて、祀られた場所が富士山本宮浅間大社と言われている。社伝によると、山宮浅間神社から806年に富士宮に移ってきたと言われている。この場所も溶岩流の末端部になり、本殿の北東の方、境内に湧玉池という富士山の湧水が湧いている場所がある。鎮火の祈りを捧げるにはふさわしい場所に神社が作られていく。昔の道者は登山前にここで禊を行っていたと言われている。今は特別天然記念物になっているので入れない。

5. 修験と登拝

—修験者は山伏と言われている方。修行によって印を得る、山岳修行をする人たちのこと。平安時代の終わりころになり、噴火の活動が収まると、山岳修行をする宗教者の方たちが富士山の中で修行をする。その中で有名な末代は駿河国の出身で、走湯山（熱海の伊豆山神社）で修行をしたと言われている。富士山以外、石川県の白山でも修行をしたと言われている。その方がたびたび富士山で登拝をし、山頂に大日寺という信仰の拠点を作り、600点ほどの経典、一切経を納めたと言われている。さらに、富士山興法寺を村山に開いたと言われている。表口は大宮・村山口と話したが、村山の浅間神社の隣に大日堂が今もある。江戸時代までは一体の富士山興法寺という修験道のお寺だった。本堂が大日堂、大日如来が富士山の中心仏と考えていたので本尊に大日如来をお祀りする。なぜ山頂に600点もの教典を埋めるのか？全国各地の霊山にお経を奉納するという事をやった。その場所を経塚（きょうづか）といい、筒の中に入れて地中に埋める。今も全国の神社やお寺に行くと経典を奉納する場所がある。このちょっと前位から末法思想があり、お釈迦様の教えが伝わっていく中で、末法の世になるとお釈迦様の教えがこの世に残らないと言われていた。お釈迦様の教えを残すために、経典はお釈迦様の教えをまとめたものになるので、経典をのちの時代に忘れられないように伝えていきたいという事で納められていく。富士山もその教えを残すための重要な場所の一つという事で教典が納められた。それに近い時代の教典が掘り出されて一部残っている。富士宮の奥宮の近くの三島岳で掘り出された経典が、富士宮の浅間大社に6巻位残っていて、残りは東京国立博物館に持っていった。

6. 登拝の大衆化と富士講

—登拝という山岳修行で、富士山の中に入ると言うことが一般の在家の信者の方にも広がっていく。多くの方が富士山に登るようになっていく。全国各地の霊山、熊野三山、高野山、伊勢神宮などに一般の方がいつぐらいから来るのか、研究の中での課題でもあるが、室町時代位じゃないかと言われている。今年、西国三十三所観音札所霊場 観音菩薩を本尊とする三十三ヶ所を巡礼するものが開創1300年。西国三十三所の札所も1300年と言っているが、15世紀の終わり位から一般の多くの方が行くようになると残っている資料から考えられている。それに沿っていくと、富士山も大体15、6世紀になると一般の人が多く行くようになると考えられている。そうになると、登山口の麓には登山者の方をお迎えする集落ができ、そこには宿坊がたくさん作られ、山伏や御師が活動するようになる。富士宮の大宮・村山口登山道では、大宮口については16世紀の初めくらいには道者坊が30位あったと書いてある。16世紀の終わり位には7つか8つ位に吸収合併されていき、江戸時代も6位、最終幕末近くになると5個位しか残らない。それを考えると須走は17軒御師がいて、御師の所に泊まりきれない時は一般の方の所に泊まったり、旅館も10軒あり多くの方が来ていた。富士宮の場合は大宮の道者坊に泊まる方ばかりではなく、すぐ7,8km先に村山がくっついているので、そこに泊まる方もいる。16世紀は戦国時代で、全国各地が戦争で大変な時代だったはずだが、そんな時代にたくさんの方が来ていたのは不思議だと思う。

—16世紀の初めから終わり位、戦国にかけて富士山の登山道、山頂まで行くルートを紹介した宗教画、富士参詣曼荼羅（富士曼荼羅）がいくつか残っている。一番有名なものが、浅間大社にある重要文化財の指定本。去年2年かけて修理を行い、きれいになった。4月から9月にかけて静岡県富士山世界遺産センターで企画展をやる予定。画面下に駿河湾、表口を真ん中に書いて、浅間大社、村山があり、表口の登山道の行程が書いてあるものになる。実際地図に落とすと三保松原が下の方にあり、清見寺、興津、駿河湾、50km位の範囲の部分の一つの画面の中に書いてある。実際にどこの

何が書いてあるか説明する人がいないと分からないもの。説明をする人がいて一度に多くの人に見てもらふ目的で作られるので、横 180cm×縦 120 cmの大きな絵。一度に多くの人に、うちのルートを使って参詣すると、こういういいことがあると説明していた。説明する場所に持って行く、来ていただいた方を対象にしないと話自体ができないので効率が良くない。江戸時代になると、登山案内図を 50～60 cm位の刷り物にして、多くの方がお土産に持って帰ったりした。刷り物なので、一度にたくさん同じものが刷れる。19 世紀以降になるとそういう刷り物がたくさん作られるようになるが、中世の終わり位はこういう絵を作り説明をする時代だった。「お金を払っていただいたら説明します」というのを昔の人はやっていた。橋のたもとにこういう絵をかけて説明をする比丘尼の人がいて、その横に小比丘尼と言われる弟子の人がいて、熊野観心十界曼荼羅という熊野の地獄絵を説明する絵があり、それを見ると説明をする人は鳥の羽のようなものが先付いた棒を指しながら説明をして、横のお弟子さんは柄杓を手に持ち、勸進をいただくとこの先をお話しますといったことをしている。こういう宗教画もタダで説明をするのではなく、喜捨を頂いて説明をするという形に使われていた可能性もある。

- 一富士山の祭神。明治時代になり、神仏分離が行われ、神様と仏様を厳密に分けてしまう。それより前の中世・近世は神様と仏様は同じものだと考えていた。「仏様、仏様」と言っているが、その方たちも外来の神様ではある。それが日本だと仏教なので、仏様、菩薩、如来とか言われる。日本には仮の姿、神様の姿として現れたものを〇〇権現と言う。基本的には神様にはなにがしかの仏が比定されていた。富士山の場合も浅間大神をお祀りしていたが、中世の時代には浅間大菩薩という名前と呼ばれたりした。ただ、浅間大菩薩は女性の神様だと言われていて、富士山の由緒を説くために「富士山縁起」という物語が中世に作られたが、それを見るとかぐや姫だと書いてある。富士山の南麓辺りで生まれて、最後に富士山に帰っていき、そこで富士山の神様になる。富士山の神様になったかぐや姫が「これから先、私に会いたければ富士山の山頂に来ればよい」と土地の人に言う。それで、畏れていて入らなかった富士山に人々が入るようになる、というもの。中世の浅間神社の御祭神は木花咲耶姫ではなく、かぐや姫や浅間大菩薩。浅間神、浅間大菩薩は仏様の姿は大日如来なので、大日如来をお祀りしているなど、神仏習合の中で色々な姿で語られるが、かぐや姫ではなく古事記や日本書紀で登場する木花咲耶姫にしたいと学者が言い始め、定着するのが江戸時代。浅間大神、浅間神は 7、8 世紀頃から出てくるが、それが木花咲耶姫だと書いていたものはなく、ほとんどが江戸時代。

7. 富士山への信仰は噴火口への信仰

- 一富士山への信仰は、究極的には噴火口を信仰していたと言える。富士山は仏様・神様が住まわれている聖地・霊山である。江戸時代以前は旧暦のもとで、6 月 1 日が富士山の開山日だった。室町時代の記録を見ると 6 月の約 1 ヶ月間、江戸時代になるともっと長めの時期を設定し開山期を作り多くがきていた。7 月中旬から下旬まで開山期間が伸びて、富士山山頂まで登ることができた。
- 一なぜ噴火口が信仰されるのか。富士山の一番高い所が剣ヶ峰で 3776m。噴火口の周囲が約 4 km、深さが 200m 位あると言われている。その噴火口の所に八葉九尊と呼ばれている仏様が祀られていたと言われている。八葉九尊がどこの峰に何を祀っているのかは、時代によってばらばらだが、基本的には①地藏菩薩②阿弥陀如来③観音菩薩④釈迦如来⑤弥勒菩薩⑥薬師如来⑦文殊菩薩⑧宝生如来の八つの仏様が祀られている。噴火口の周りにいくつも峰があり、今の呼び方だと伊豆岳、成就岳、駒ヶ岳、久須志岳などがあるが、昔は仏教的な言われ方をしていて、外側のピークに八つ仏様がお祀りされていて、それが八葉。内院ということで大日如来が中心の仏様になる。八葉と九番目

中心仏で八葉九尊という。それが噴火口の底にいらっしやると考えていた。大日如来が富士山の御祭神になるので、浅間大社のホームページには今でも「浅間大神が富士山の噴火口の中に鎮座されています」という説明がされている。

- －「御鉢めぐりは御八葉めぐりから」。噴火口の周りをまわるのを「御鉢めぐり」と言う。今噴火口がすり鉢状になっているので、「御鉢めぐり」という言い方をするが、元々は八葉の峰々を廻る「御八葉めぐり」が「御鉢めぐり」になったのではないかと考えられている。
- －「ご来光は御来迎から」。朝日が昇る瞬間をご来光というが、今、富士登山はご来光が一つの目的になっている。もともとご来光は「御来迎」で阿弥陀如来が極楽浄土へ導いてくれるために現れてくれる場面をいう。山頂でブロッケン現象を見る機会があったと思う。いないはずの所に何かが見られる場面を御来迎と捉えた。阿弥陀如来の御来迎の場面を描いた宗教画は立山曼荼羅がある。今では、科学的知識があるので、神仏のおられる聖なる空間とは空気が薄い山頂での錯覚ブロッケン現象だと分かる。御来迎の場面も、ブロッケン現象をご来迎で宗教的なイニシエーションを感じられる場所が山頂だった。昔はすり鉢が大きなお賽銭箱に捉えられていたとも言われるが、各登山道を上っていったところに噴火口の底を拝む拝所があり、そこから噴火口の底に向けて御祈願をしてお賽銭を投げ入れていく。そういうことをするのが富士山の信仰登山の大きな目的になっていた。

8. 富士講

- －講は同一の信仰を持つ人々による結社、グループのこと。富士講以外にも伊勢講、春日講などがある。その中の富士山を信仰するグループのことになる。表口は西側の方に向いているが、西の方にも富士講と言われているグループがたくさん作られている。江戸だけでなく、東海地方や近畿地方にもたくさん作られている。こういう人たちが使っていたのが富士宮のルート。富士山にお参りするときの「富士参りの歌」という道中歌もたくさん三重県に残っている。富士講が盛んになると、関東地方の角行を開祖としてお祀りする富士講の一派の方は、その方が修行した場所を聖地として捉えて廻っていく。それが巡拝につながる。その場所が富士五湖や白糸の滝。八海巡りということで残っていて、富士講の人はそこを回って修行する。それが江戸時代。
- －関東地方で大流行する富士講の影響は大きい。その影響の一つに富士塚がある。遠方から富士山に来るのは大変なので、作られたもの。現在、国の指定の有形民俗文化財になっている富士塚が5つある。そのうちの一つが東京の下谷坂本の富士塚。毎年富士塚の開山日があり、富士山の開山日と同じ日に設定されていることが多い。行くと解放されていて、一般の方も登ることができる。静岡県にも富士市に鈴川の富士塚というものがあり、中は砂の山になっている。「田子の古道」という古い記録を見ると、「富士参りの輩は、浜に下りて石を一つずつ拾い上げてきて、この山に登りこの後富士禅定、富士山頂に登山することが軽くなるように頼んでいったので、ここを富士塚と言われるようになった」という記録も残っている。

9. 登山の多様化

- －19世紀になると神仏分離が起り、その影響で御師の制度が廃止されたり、女人禁制が撤廃されたり、潔斎を簡略化したり、交通事情が発達して、五合目まで自動車で行くなど、登山そのものが行いやすくなる。富士講、特に江戸で流行したグループは、教派神道の影響を受けている富士講なので明治時代以降も神仏分離の影響をそれほど受けない。むしろ明治時代以降も非常に栄えていく。このように近代になると登山の多様化が広まった。